

# 経験の浅い教員を育てる授業改善の在り方

—生徒の思考の動きに視点をあてて—

The state of the class improvement as which an inexperienced teacher is trained

—While addressing a viewpoint to a movement of student's thought.—

前田 治 Osamu Maeda

(家政学部こどもの生活専攻)

## 抄 録

現在、教員の大量退職に伴い、急速に世代交代が進んでいる。そのような中、経験の浅い教員を育てることが急務である。教育の中心は授業である。しかしその授業改善は何故か進まない。そこで、本稿では経験の浅い中学校教員の授業改善を進めることを目的に、まず、授業研究が授業改善に結び付かない理由を考察し課題を明らかにした。そのうえで、道徳の授業を例に、生徒理解を核にした授業改善のために、逐語記録から抽出生徒の思考の動きを分析する方法を示し考察した。結果的にその方法は、生徒のより深い内面を見つめることになり、生徒理解を核にした授業改善につながると結論付けた。

## キーワード

日常の授業改善 Daily class improvement、生徒理解 Understanding of students、  
逐語記録 Literal record

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 経験の浅い教員に必要な授業改善
- 3 授業改善に生かされない授業研究
- 4 道徳の授業改善
- 5 生徒理解を核にした授業改善
- 6 授業改善に必要なのは
- 7 授業の実際
- 8 思考の動きを追う協議の実際
- 9 授業分析の具体
- 10 おわりに

### 1 はじめに

授業改善は何故進まないのか。かねてから抱いている疑問(問題意識)である。

教育公務員について、教育公務員特例法第 21 条には「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」と定められている。これは、教育公務員に限ったことではな

く、大学等も含めた全ての教員に課せられたことであろう。

教育関係者が使う授業や研究と付く語句はいくつかある。はじめに、本稿に登場する語句の混同を避けるために明確にしておく。授業研究とは授業に関する研究。この授業研究には①研究として特別に行われる授業実践を対象にするものと、②普段日常的

に行われる授業実践を対象とするものに分かれる。本稿では①の授業実践を「研究授業」、②の授業実践を「日常の授業」とする。授業分析は「研究授業」や「日常の授業」を分析すること。研究協議は「研究授業」の協議と「日常の授業」の協議と区別が出来るように記述する。そして、これらはいずれも授業改善を目的に行われるものである。本稿はその授業改善の在り方を論ずる。

## 2 経験の浅い教員に必要な授業改善

現在愛知県では、教員の大量退職、大量採用が進行中であり、急速に世代交代が進んでいる。

2014(平成 26)年愛知県義務教育問題研究協議会発表のデータによれば、50 歳以上が 37.3%、6 年経験未満 29.6%で、10 年目～30 年目の中堅教員層が著しく少ない状況にある。

学校運営で言えば、これまでは中堅教員層が校務分掌の学年や指導部の主任を務めリードしてきた。しかし、今では3年目が生徒指導主事を務める学校も増えるなど経験の浅い教員で学校を運営せざるをえない状況である。これは、先輩教員が後輩教員を育てる文化の喪失を意味する。となると、経験の浅い教員が自ら学びながら重責を担っていくしかない。このことは授業においても同じである。先輩教員を見て感じて受け継ぐというシステムが、今や崩壊している。

このことから経験の浅い教員の力量向上に今まで以上に取り組む必要がある。本稿では、この経験の浅い教員(中学校教員)を授業で育てるという視点で論ずる。

## 3 授業改善に生かされない授業研究

学校(義務教育)では、文部科学省または各県市町村の教育委員会より、例えば「主体的な思考力・判断力を高め、豊かな表現力を養う授業の在り方」などとテーマが指定され、特別な授業研究が行われる。その成果をまとめた研究報告書(紀要)は、その最後に「全員が課題に向き合い、より多くの生徒が考えを深めることにつながれた」などとプラス評価だけの成果でまとめられているものがある。もしその成果が事実なら学校教育は年々改善され、実のある教育が日本中で展開されているはずである。しかしその実感はない。何故であろう。

その理由の一つに、指定を受けて行われる授業研究がその場限りの研究であることをあげることが出来る。各学校は指定を受けると公開授業や成果発表会の準備に追われる。本来なら、その成果が日常の授業改善に生かされてこそ研究であり、そこからさらなる授業改善がスタートするべきである。しかし、その指定に伴う多忙の日々が終わると、「やれやれ終わった」と開放感や脱力感が学校全体に蔓延する。そして、翌日から研究の前と変わりのない授業が展開されるのである。

理由の二つ目。どの学校でもおおよそ年度当初に研究テーマが示され、それに向けて研究推進(以下、現職教育)・授業研究が位置付けられる。例えば「学ぶ楽しさを実感し、主体的に取り組むことの出来る授業の創造」というように今日的課題を含んだテーマが決められる。しかし、それが形骸化していることをあげたい。ある学校の2学期、十名ほどの教員に「現職教育のテーマは」と尋ねたところ、誰も満足に答えられなかった。まさに表題を並べただけで、学期に1回か2回の授業研究を行っておしまいである。<sup>注1)</sup>

これらのように研究のためだけの特別な授業研究、テーマを掲げただけの授業研究では、どれだけ研究指定や現職教育を重ねても授業改善につながらない。とりわけ、経験の浅い教員の心には響かないであろう。この授業研究の姿勢に授業改善の課題があると痛感している。

## 4 道徳の授業改善

授業研究の目的は授業改善である。しかし、述べてきたように授業研究は継続されず、しかも形骸化しているため授業改善はなかなか進まない。そこで、本稿では、日常の授業に焦点を当て、その改善をどうすべきか在り方を探る。

### 4.1 授業改善に道徳を取り上げる理由

さて、経験の浅い教員の悩みは何か。学級経営、部活動、問題行動・いじめ・不登校等の生徒指導、保護者対応、教員間の人間関係と様々ある。しかし教育活動の中心は授業である。どうもこの日常の授業改善は置き去りにされている感がある。授業改善を通して、いつかは学級経営・生徒指導等の悩みの解決にもつながっていききたい。

ただ、授業と言っても中学校は教科担任制であり、

教員は専門免許の教科を主に担当する。その教科の授業法にはそれぞれ特性がある。全教員共通で取り組むには、どうしても教科の枠という壁が存在する。そこで、専門免許にとらわれず全教員共通で取り組むことの出来る道德の授業を取り上げ経験の浅い教員を育てるモデルとする。

他に道德の授業を取り上げる理由は、道德の授業には、必ず考え話し合う授業展開が位置付けられているからである。文科省は 20 世紀型の知識理解重視の講義中心の授業<sup>注2)</sup>から 21 世紀型の子どもを主体とした探求・課題解決・体験型の授業への変換を図ってきた。しかし、ベテランの教員に多いが未だに講義中心だけの授業も展開されている。

この 21 世紀型に必要なのは、考え話し合う(議論する)授業である。特にこれが重視されたのは、考え話し合う(議論する)ことが、生徒が社会に出るにあたり重要なコミュニケーション力やチームで課題解決出来る力の育成の基となるからである。

その考え話し合う(議論する)ことで成立する道德の授業改善が出来れば、他の教科の授業改善にもつながっていくと考える。

## 4.2 授業改善における課題

筆者著『道德の授業における教師の悩みに関する研究』<sup>1)</sup>の中にある道德と他の教科と比較した「教員の道德の取組み姿勢」「道德の難しさに関する意識」についての調査では表 1 のような結果が出ている。

表 1 少経験者対象尾張道德教育講座：筆者調 2007

(%)	取組み やすい	取組みが 難しい	総計
積極的	12.2	27.8	40.0
消極的	3.5	56.5	60.0
総 計	15.7	84.3	100.0

道德の授業に対して消極的な教員が 60.0%、教科より取組みが難しいと感じている教員が 84.3%いる。ここで重要なのは、取組みが難しいからこそ授業改善を行い、積極的に道德の授業に取り組む教員に育てることである。

そこでその意識のもと、各地では経験の浅い教員を対象にした研修が実施されている。しかし気になる点がある。筆者は道德の研修を実施するにあたり、受講者から予め記述式の質問を受けることにしている。その内容には、「よりよい授業の方法」「生徒がたくさん発言する手立て」「ハンドサインの活用」「ワークシートの書かせ方」「分かりやすい板書の仕方」「生

徒に効果的な教材」等を教えてほしいという文言が並ぶ(2018 年 N 市道德研修の質問より)。

このように授業の技術(ノウハウ)を求める内容が多いことである。経験の浅い教員はすぐに役立つ授業改善の教授を求めているのであろう。しかし、教育の奥深さは技術(ノウハウ)以外のところにある。例えば、生徒理解を核にした授業改善である。その必要性に気が付かないと真の授業改善はなかなか進まない。

## 5 生徒理解を核にした授業改善

授業改善には教員側の視点と生徒側の視点がある。教員側の視点を重視したものが、教育技術(ノウハウ)等、教授方法を核にした授業改善の追求である。

一方、生徒側の視点を重視したものが生徒理解を核にした授業改善の追求である。

田島薫は、授業改善の目的を「教師が教えたと思っていることが、ほとんどまったくといっていいほど子どもの心に残らず、まして、個のあり方づくりや人間形成に響いていない空しさを自覚し、その克服のため」<sup>2)</sup>と述べている。同感である。この克服こそ生徒理解を核にした授業改善である。先に述べた経験の浅い教員を対象にした研修の質問の中に「数学などは計算が出来るようになったなど具体的な変容が分かるが、道德では分からない。道德の授業が生徒の心に響いたのか変容が分かるようにするにはどうするか教えてほしい」というものがあつた。この生徒の変容を捉えようとするのが生徒理解を核にした授業改善の追求である。これこそ真の授業改善である。

### 5.1 逐語記録の活用

授業実践を分析したものが、授業分析である。その授業分析に欠かせないものが授業記録である。

授業分析の創始者といわれる重松鷹泰<sup>注3)</sup>と共に、日本独特の授業研究を展開してきた上田薫は「いろいろな雑誌でたまたま見る授業記録は、スペースのためか、肝心のところがはしょってあるのがほとんどである。多分考えかたの上で、子どもの具体的なありかたより教材の展開のほうの比重が大きいのであろう」<sup>3)</sup>と述べている。このように多くの研究報告書(紀要)等は部分的に掲載されているだけである。このことは先に述べた研究のためだけの特別な授業研究、プラス評価の成果のみを誇張した研究に通ず

るものがある。これでは、研究者・授業者・観察者または記録者の恣意的な判断が入り込み、分析結果、研究の成果に疑義を挟む余地が生まれる。

この授業分析における授業記録について、的場正美は授業分析を定義する中で「詳細な授業逐語記録を基礎に、授業の諸要因の関連、子どもの思考、教師の意思決定を解釈学的・経験科学的に解明する研究」<sup>4)</sup>と、詳細な授業の逐語記録を基礎にする重要性を述べている。

そこで、本稿では、この1時間の詳細な授業記録(以下、逐語記録)を活用し生徒理解を核にした授業分析を行うことを授業改善の柱とした。重松が「授業の1時間というのは、一つの単位であって、観察者や記録者の勝手に出来ないものである」<sup>5)</sup>と述べているように、逐語記録は1時間まるごと教員自身の姿を鏡に映すことと同じである。そこに映し出された姿を、見つめてこそ授業改善に向けてスタートが切ることが出来る。

## 5.2 逐語記録から分析するもの

生徒理解を核にした授業改善のために、授業の逐語記録を位置づけ、記録から授業を分析する。では、具体的に記録から何を分析するのであろう。

分析するのは重松・上田が言う生徒の思考体制である。この思考体制を重松・上田は「判断の背後に作用しているものの総体」<sup>6)</sup>と説明している。

それを筆者なりに解釈する。思考体制の体制とは、「各部分が統一的に組織されて一つの全体を形づくっている状態」(デジタル大辞泉)である。それを受け思考体制とは、思考全体を形づくっている各部分が統一されている状態とした。では、思考全体を形づくっているものは何か。それは、生徒の思考に影響を与えている全て(総体)である。具体的には生徒がこれまで生きてきた中で影響を受けた家庭環境・友人関係・教員との関わり・学校生活の様子等々の全てであるとした。

生徒の授業における思考の動きは生徒の思考体制を基になされている。それが発言に滲み出ると考える。以上のことを踏まえ、筆者なりに逐語記録から分析するものをまとめると、分析するのは思考体制に裏付けられているであろう思考の動きであり、それが表出する発言である。そこで分析では思考の動き(発言)の深い解釈を行うのである。

では、それが何につながるのであろう。逐語記録から思考の動き(発言)を解釈することは、生徒のよ

り深い内面を見ることになる。それは結果として、生徒理解の変革の契機となり、授業改善のみならず教員の自己変革につながると考える。

## 6 授業改善に必要なのは

ここでは、授業改善に必要なことをまとめておく。

### 6.1 指導案は必要か

さて、授業改善に必要なのは、授業計画でも指導案でもない。特に指導案は授業改善に最低限必要と思われるがちだがそうでもない。意外と授業研究を妨げているのは、形式的な指導案の作成である。日常の授業改善をするのであるなら、物理的にも毎回指導案を書くことは困難である。

指導案は指導者が生徒にとってより良い授業を行うために必要ならば準備すればよく、研究のためだとか、参観者のためにあるものではない(指導案の重要性を否定しているのではない<sup>注4)</sup>)。そもそも案なので、作成から日が経てば生徒の様子も変わる。そうすると朱書きで訂正する必要がある。しかし一度作成されると訂正されることはあまりない。であれば、指導案は最低限必要事項を記入し、自由形式でよいと考える。

もし、授業者が参観者のために用意するなら、最低限「本時のねらいと教材」を提示したい。さらに、本時で着目してほしい生徒(抽出生徒)とその生徒の普段の様子が記されているものが提示されているとよい。

一方、経験の浅い教員にかかわらず参観者はつい指導案を通して授業を見てしまう。それより生徒と同じ目線で椅子に座り、授業を受けて、この授業は分かりやすいのか、生徒の心に響いているのかを考えながら参観する方が重要である。授業者は生徒と1時間、真剣勝負をしている。指導案と見比べながら授業を参観するのではなく、真剣勝負の迫力を肌で感じて参観することの方が大切である。

### 6.2 生徒不在の協議からの脱却

授業が実施された後に実施されるのが研究協議である。研究協議は研究授業の後に授業参観者が参加して実施されるのが一般的である。

しかし、ここで目指すのは日常の授業改善である。そこで、日常の授業においても同僚との協議を実施したい。この日常の授業の協議は、むしろ事前事後

の授業検討、教材解釈、授業分析と言った方がよいかもしれない。

研究授業も日常の授業も協議が感想の言い合いに終始してしまうケースがある。例えば、「板書は、もっと大きい字の方が見やすい。黒板のふちが光って見えない」「声の大きさについて教員はよいが生徒の声が小さい、繰り返し指導が必要」「範読をもっとゆっくり」「資料提示はもう少し後で」などである。

少しレベルが上がると、指導案に照らし合わせて「あの発問ではなく、こう発問した方が…」「終末にビデオを用意したことで、生徒の心にねらいがストンと落ちた」などである。

これでは、生徒が不在である。そこで授業改善に必要なとなるのが、先にも述べたが授業の事実を記した逐語記録である。この逐語記録を基に生徒の思考の動き(発言)を分析する協議を行うのである。教員はとにかく忙しいが、この逐語記録があれば、2人いるだけで授業分析・協議は成立する。ここで少し横道にそれ組織論になるが、授業を変えたいと願う教員が1人仲間をつくれれば2人になり、学校も変わっていく可能性がでてくる。それにもう1人加わり3人になれば、中学校なら1年から3年各学年に配置し、小学校なら低中高学年に配置することが出来る。その3人を柱として授業を変えていくことが出来れば、日常の授業の改善も進む。

## 7 授業の実際

ここからは、取組みの実際として、授業案・授業の逐語記録・協議の記録を載せる。

授業は道徳、教材は浜田広介作「泣いた赤鬼」。T市立K中学校第2学年にて実施(2017・2・6)。授業者は中学校経験2年目Y教諭。逐語記録は筆者である。

### 7.1 授業案

先に述べたように日常の授業改善である。Y教諭には、普段行っている日常の授業を公開するように指示をした。よって詳述した指導案はない。ただ、参観者のためにY教諭に提示するように指示したのは、①教材 ②授業のねらい ③授業への思い ④発問(発問は少なくすること) ⑤授業の中心に据える抽出生徒の様子を示すことの5点である。尚、参観者には、上記①～⑤を読んだ上、抽出生徒が発問に対してどんな発言をするか予想をしてくることにした。

(以下、①～⑤はY教諭の記述)

①教材名：泣いた赤鬼

②ねらい：B-(10) 友情・信頼

③授業への思い：本時では抽出生徒Fを中心に据え、友情の意味を深く考え、友達の存在によって自分が変わる素晴らしさや自分の存在によって友達が変われる素晴らしさを感じさせる授業としたい。

④発問：発問を「1.青鬼はいい友達?」「2.改めて考える友達とは?」の2つのみとする。

⑤生徒Fの様子:今年度を通して、気持ちや行動を変えていきたいと思ったのが生徒Fである。

<昨年度～4月当初の様子>

・生徒Fは自分に自信がないが、前に出たい気持ちがある。ただ自信がない分「学級のために自ら行動することが出来ない」「特定の人にしか声をかけられない」というところが見受けられた。

<最近の様子>

・生徒Fは4月当初と比べると周りの友達のおかげで徐々に自分の責任を果たすなど変わることが出来てきている。団長をした時には、1人ではなかなか覚えきれなかった振り付けを、友達に教えてもらっていた。しかし、その振り付けをクラス全体に説明する時には、「Aが一番上手だから、みんなAに聞いたらいいぞ」と自分がするのではなく周りの生徒に説明させていた。

・ある友達が生徒Fを認め、その思いを多くのクラスメイトが感じ、生徒Fを認めるようになってきた。生徒Fが少しずつ自信をもって色々なことに取り組めるようになってきたのは、間違いなく友達のおかげである。

### 7.2 授業の逐語記録

以下に、記録を基に授業を再現する。尚、記録は、抽出生徒Fを抽F、不特定多数の生徒の反応は( )表記とした。

001 教師：始めます。円陣

002 教師：道徳とは？

003 抽F：そうですね、人生勉強

004 教師：2月3日と言えば…

005 抽F：節分

006 教師：豆まきした？

007 抽F：うん

008 教師：何を追い出した？

009 抽F：俺自身。俺の敵は俺…自分の弱いところを追い出したい

010 教師：はい、どうぞ  
011 敦也：ただ、投げた？  
012 生徒：(父親)  
013 敦也：鬼が父親  
014 生徒：(幼稚園？)  
015 教師：今日は鬼についての話です。泣いた赤鬼  
016 生徒：(知ってる、知ってる)  
017 教師：資料を配ろうと思うけど、随分余分に印刷しちゃった。もらった人から読んでもらっているから  
018 生徒：(笑い)  
019 教師：(範読)…読んだ後から、感想を聞くからね  
020 教師：時間をとるね  
021 教師：読んでどう？  
022 光子：もし自分が赤鬼の立場だったら、青鬼に申し訳ない  
023 教師：何で？  
024 光子：自分を思ってやってくれたけど、たぶん青鬼は傷ついたと思うから  
025 教師：智也  
026 智也：青鬼がかわいそう  
027 教師：何で？  
028 智也：赤鬼のために自分を犠牲にして…何と言うんですかね…自分を犠牲にして友達のことを思う青鬼は優しい  
029 教師：こっちは？  
030 東弥：赤鬼がかわいそう  
031 教師：何で？  
032 東弥：自分(青鬼)だけが、いい気になって  
033 教師：首をかしげているな、どうぞ  
034 夢花：赤鬼と青鬼はたぶん友達。青鬼が悪い人だと思われているから、赤鬼もかわいそうだし、青鬼もかわいそう  
035 教師：みんなと、ちょっと違う？  
036 夢花：旅に出なければならなかったから、青鬼もかわいそう  
037 山田：青鬼の計画が分かっているんだったら、青鬼の計画に赤鬼は抵抗しなきゃいけないのに、だから青鬼がかわいそう  
038 教師：こっちは？  
039 教師：庄太、違うか？  
040 庄太：青鬼は自分勝手  
041 教師：何で？  
042 庄太：う～ん、でも、鬼ということで、一番悪

いのは人間、鬼は人間です  
043 教師：というわけで、今日の授業は終わりです  
044 生徒：(笑い)  
045 教師：では、青鬼はいい友達ですか？(発問①)  
046 抽F：分からないです  
047 教師：何が？  
048 抽F：迷っています  
049 教師：どう迷っている？  
050 抽F：青鬼は赤鬼のためにやったが、本当は分からない。赤鬼は心残りがある…  
051 教師：Fの意見について、どう思う？  
052 恭平：お互いがお互いのことを思ってやったんだから、いい友達  
053 教師：どう？  
054 抽F：まだ、迷っています  
055 教師：すず  
056 すず：いい友達だと思う  
057 教師：何で？  
058 すず：赤鬼は人間と仲良くしたいと思っているから、赤鬼のためにやってあげているから。青鬼が暴れなかったら、人間と仲良く出来ない  
059 教師：目的を達成させたから、いい友達だと？  
060 抽F：まだ、迷っている  
061 教師：こっちは？  
062 内村：僕も分かりません。それは、青鬼が悪さをして、旅に出ていくことは赤鬼は、その結末が分かっている。青鬼は別の理由があって、村を出たいから…赤を使ってやれ…何か他に裏があるのかと思った…赤鬼を利用した  
063 教師：いい友達じゃない？  
064 内村：ちょっと感じた  
065 内村：何も言わずに出ていくなんて、いい友達じゃない  
066 教師：智也  
067 智也：本当の友達なら、先のことも考えて…悲しくなるなら…  
068 教師：アミ  
069 アミ：よく分かりません  
070 教師：どこが？  
071 アミ：青鬼が無理矢理引っ張って、赤鬼が望んでいたことと違う  
072 教師：青鬼はいい友達？  
073 アミ：分かりません  
074 教師：青鬼が出て行ってまでも…  
075 琴畑：いい友達、自分が悪いと思われても、赤

鬼のために思ってやったことなので、いい友達

076 教師：どう？

077 小島：赤鬼が人間として、仲良くするためにやってあげたことなので、いい友達

078 教師：おっ、何だ？

079 抽F：先生、少し話を変えていいですか？この言葉知っています？「何かを得ようとしたものは、何かを失う」

080 教師：すごいな。で、青鬼はいい友達？

081 抽F：どっちでもない。いい友達なのかな？なんか、ひっかかる。…何かが、見つかってない

082 教師：Fの何かを見つけてくれる人いる？

083 庄太：いい友達だと思う。一人のために何か考えて行動にうつす。たくさんの人ではなく、たった一匹の鬼に利益を与えているから

084 教師：犠牲を払えば、友達？

085 庄太：難しいです。僕にはまだ早いです

086 教師：その人に、犠牲を払えば友達？

087 葵衣：あんまり、いい友達じゃないって思う。青鬼は赤鬼のために、自分が損する。青鬼が旅に出た。その間に何も出来ないから、赤鬼からは、青鬼のために何もやってあげていない

088 教師：そこにひっかかっているのか？

089 抽F：はい

090 教師：どうぞ

091 憲伸：犠牲を払えるのは、その人に、信頼をもっていなきゃ出来なかったから、いい友達

092 教師：どうぞ

093 古市：例えば、通りすがりの人にナイフで刺されてしまう、その時に身代わりに、守ってあげられるぐらい仲がいいと、信頼出来ている

094 教師：犠牲を払うだけじゃない？

095 菜々：私が思うには、いい友達だと思うけどそれは、よくなかった。関わりすぎた。いい友達でも一線は引いてほしい。そこまでしなくても、一緒に何かを考えるならよかった

096 教師：こんなやり方は、いい友達？

097 菜々：やり過ぎかな？友達だけど、自分もやってあげるといいうのもあった

098 教師：うん、うん

099 光子：意見が似ているけど、悪い友達じゃないけど、もっと他のやり方があったと思う。赤鬼の意見を聞いていない。青鬼自身の満足感のような気がする

100 教師：青鬼の満足じゃないのってことか。ずっ

と悩んでいたF

101 抽F：えっと、2度も3度も泣いたと書いてある。赤鬼も後悔しているから、いい友達じゃない

102 教師：いい友達って、どんな友達？（発問②）

103 原井：お互いのことを考えて、自分のことより、先に相手のことを考える

104 教師：どうだ？

105 雄介：赤鬼は、人と仲良くなりたくて、そのためにヒーローになる必要がある。悪い役を引き受けたのは、いい関係だったからこそ、青鬼は赤鬼のために、その役をやった。赤鬼の思いを実現させたいと願う、信用し合える鬼同士が、いい友達

106 教師：どう？

107 綾乃：相手のことをすべて受け止めて、違うことは違うと言える関係

108 教師：真由

109 真由：居心地がいいと、いい友達だと思う

110 教師：居心地がよかったら、いい友達？

111 前川：そうじゃないですか。互いに分かりあってあげる

112 教師：互いのこと分かり合うってどういうこと？

113 前川：嫌なことがあっても雰囲気で察してあげられる

114 教師：察するってどういうこと？

115 友希：仲がいいから察することが出来る。そんな友達が出来たらいい

116 友希：お互い理解し合う、辛いことがあったら聞いてくれる、自分のことを理解してくれる

117 教師：はい、高良

118 高良：言いたいことをはっきり聞いてくれて、お願いしたら、しっかり聞いてくれる

119 教師：悪いことだったら？

120 高良：しっかりした人です

121 教師：しっかりした人がいれば？

122 抽F：全部をさらけ出せる、隠し事せず、心からさらけ出せる。隠し事はNG

123 教師：一方の友達がさらけ出すでもいい？

124 抽F：だめです

125 教師：菜々は、「いい友達でも一線引いてほしい」、全部さらけ出さなくていいよって言ったよ

126 抽F：え〜っと、さらけ出さなくてもいいけれど、気を使わなくていいなら、いい友達

127 教師：全員聞きたかったけど、いい友達って難しいよね。何がいいのかなって思うの、難しくない？

先生もね、なんかね、全然関係ないけど、結婚式の席次表に新郎の友人って書いてあるんだけど、この友人ってみんなが言ってくれたことが友人っていうことなのかなと思って。Fが言った「心からさらけ出せる」って、言いたいことを言うんじゃないよね。心をさらけ出す。うん、友人ってこういう関係かな。相手のことを考える、信頼すること、犠牲をはらうこと。その人のためにやろうと思うことかな

128 教師：では、最後に「友達って何だろう？」感想を日記に書いてきてください。(以上、生徒名は全て仮名)

## 8 思考の動きを追う協議の実際

日常の授業や研究授業における協議を教育技術(ノウハウ)等、教授方法だけを話し合う場にしたい。そこで協議では授業1時間分の詳細な逐語記録を活用し、生徒の思考体制を基にした思考の動き(発言)を教員がそれぞれどのように解釈したのか話し合いたい。要するに「この授業を通して、一人の生徒をどのように見るのか」、生徒理解のための協議である。よって参観者は授業者Y教諭が記載した「授業の中心に据える抽出生徒Fの様子」を読み、Fの発言を予想して協議に臨むのである。

### 8.1 協議の司会

一般的に実施されている協議では、教務主任または現職主任が司会を務め、授業者の反省から始まるものが多い。しかし、経験の浅い教員を育てる意味から、主任クラスではなく少経験者に司会を行わせたい。協議の司会を行うことは、ねらいをもって授業を行うのと同じである。この経験は必ず授業改善に役立つはずである。ここでは教員約50人を4グループに分け、司会者を3年目2人(AとBグループ)2年目1人(Cグループ)初任者1人(Dグループ)とした。

尚、司会者には、協議のポイントについて「①抽出生徒Fを中心に据えた協議にすること ②司会には抽出生徒Fについて自分自身の解釈を明確にもって臨むこと ③教授方法に協議が進みかけたら修正すること ④グループ議論のまとめを全体で報告すること」の4点、提示した。

### 8.2 協議の実際

以下は、上記④の報告の記録(筆者著職員向け日よりより転載)である。尚、報告の方法やまとめ方は司

会者に任せた。(※印は協議に対する筆者のコメントである)

#### Aグループ(3年目)

- ・Fは好き嫌いがはっきりしている。
- ・Fは「人の目を気にする生徒で、自分の意見を持たない生徒」と予想したが「言葉は足りないが、言いたいことを言う生徒」という意見もあり、生徒の理解は教員によって違うことを改めて認識した。
- ・Fは1年では応援団長をしていたので青鬼のやってあげようとする気持ちには共感ができていたのではないか。
- ・Fは純粋な生徒なので、話がハッピーエンドだったら素直にいい話と受け入れてしまっただろう。しかし結果、赤鬼を傷つけてしまったことについて、引っかかっているのだろう。ここに、Fの気にする性格が表れている。
- ・Fは中学生になって仲間に助けられてきている生徒。Fの誤解されやすい態度や言葉を補い、分かってあげようとする生徒に、Fは助けられている。Fはそのことに気付いていない。しかし、No.087の葵衣の意見にNo.089で「はい」と素直に反応しているところなど、他の意見に耳を傾けることが出来る様子も見受けられた。

・友達とはNo.102で「さらけ出せる。隠し事はなし」と発言していたが、授業後の感想には「一緒に笑ったり、泣いたり、相手のことも受け入れたい」と書かれていた。そのことから、相手のことを思う気持ちが出てきたと考える。今後も人との関わりの中で、自分のことだけではなく相手の気持ちや先のことを考えるなど成長していくと思われる。

#### Bグループ(3年目)

司会：Y教諭から見たFは「お調子者、思ったことをすぐ口にする、その場のノリや空気動く」であった。では、授業からFはどのように見えてきたのだろう。

- ・すぐに周りとは相談する。範読中もプリントから目を離し、周りの様子を窺う。自分自身に自信がない。周りの態度、様子をとても気にする。自分の素がなかなか出せないのだろう。
- ・No.046「分からない」No.048「迷っている」という発言があるが、周りが気になってはっきりとした意見が言えない、もしくは物事を深く考えたことがないのではないか。

司会：生徒Fの友情の捉えについて

- ・今回FはNo.101で「青鬼はいい友達ではない」と言



った。その理由は、青鬼は赤鬼を泣かせたから。「泣く＝悲しい」なので、悲しませた青鬼は悪いという構図であろう。

・Fのいい友達の定義は、No.122「お互いにすべてをさらけ出せる」ということ。すべてをさらけ出して、一緒に楽しめる、面白く過ごすことが出来るという感覚ではないか。

司会：「生徒Fに考えさせたい友情とは？」

・FはNo.101「泣く＝悲しい」なので「泣かせる＝悪い、少なくとも良くはない」と言った、単純な発想しかないのであれば犠牲や我慢によって成り立つ友情もあることを感じさせたい。

・友情によって支えられること、救われることがあり、また、友情によって傷つくこともあるということを知ってほしい。それを知ることによってFが友情について考えるきっかけになるといい。

Cグループ(2年目)

・事前にY教諭から聴いたFは「自信が無い、周りの指示や反応がはじめて動く能動的な性格、スポーツ万能で能力だけでやってきた」であった。推測するに、すぐに流されて深い考えは出来ない生徒、真剣な場を茶化してごまかす生徒という理解で参観した。

・No.045 発問①について、Fの発言予想として「いい友達」、「悪い友達」という分類分けをしたキーワードを考えていたが、FのNo.048「迷っています」No.054「まだ、迷っています」という答えは予想出来ず驚いた。

・そのNo.048・054の「迷う」という発言は、かっこいい言葉を思いつくまでのつなぎの時間だったのではないか。

・本人の意見は、「友人」という範囲が自分の身近にいる人にしか思い描くことが出来ず、楽しければいい、自分をもちあげてくれればいいという友情観の範囲の中でしか、考えられなかったのではないか。

・No.102 発問②について、Fは友人の意見に引っ張られたと思う。No.116 友希、No.118 高良の意見に引っ張られ、No.122で「すべてをさらけ出すことが出来る」ことが真の友情と位置づけたにではないか。しかし、その考えもY教諭に指摘されると、翻意するなど、自分なりの固まった結論ではなかったと考えられる。

・Fは深い価値を本当に考えられなかったのか、というところをしっかりと考えていたと捉えている。他人に流されるということは、言い換えれば他人の意見を受け入れ、自分の考えを発展させることが出来ると捉

えられないか。純粹無垢であるが故に、今後の友人次第で考え方の裾野を広げていくことが出来るのではないか。

・現在の友達関係から考えると、中心に自分がいて自分の観点でしか物事を考えられなくなる可能性がある気がする。「他者」という目線をいかに養い、「自己」と「他者」との双方向型の考えまで深めさせるかが今後の課題となってくる。

・喜びだけでなく、後悔や苦しみまで共有出来る間柄は、日頃の学級経営や道德の授業が要になることを再認識した。

・F自身、体育祭で団長としてクラスの先頭に立ち引っ張ってきたという自負があると思う。その一方で、友人はFを団長として立たせるために、気付かないところで支えていた。そのことにFが気付けば、ねらいにある「友情のすばらしさ」に気付くことになるのではないか。

Dグループ(1年目)

・最初にNo.002「道德とは？」と聞かれた時にNo.003「人生勉強です」と面白おかしく発言していたことから一見強そうに振る舞っているが実は弱い生徒であろう。物事を深く考えることは苦手で、その弱さを隠そうとしていると感じた。

・最初の発問から、No.046～「分からない」を繰り返し発言していたので、物事をはっきり答えられない生徒である。

・自分に自信が持てない。最初の感想を追っていく段階で、青鬼に対してNo.052～「いい友達」という意見が多く出ている中、Fは指名されるとNo.054・060「まだ、迷っています」と答えていた。その後様子をしばらく見てみると、隣の生徒に何度と話しかけ確認している場面が多くあった。他の人に同意を求めている姿から、自分に自信がないと言葉に出来ないかと予想した。

・Fにとっていい友達とはNo.122「自分をさらけ出す」と言った時、本人よりも相手がどう思っているかが気になっていると感じた。Fの中でいい友達とは何か、はっきりしなかったは思うが、「さらけ出す」という言葉が出てきたことは、互いに認めて欲しいという考えがあったように思える。

・Fの本心が周りの雰囲気引き出されたように感じた。これは、しっかりとNo.046「分からない」と最初に言えたことが大きいと考える。

(※協議全体を通して、Fについて新たな発見があったのではないか。Fがどんな生徒なのか、仮説を立

て議論が出来ているところもあった。また、発言だけでなく、Fの仕草からも理解を試みようとしている。さらに、授業の中でのFの変容を捉えるなどして、Fを成長させるためには、友人の力が必要と結論付け、Fを今後どのように成長させたらよいかが表示されているところもある。Fの今後の可能性に言及したりもしている)

### 8.3 授業者の反省

よくあるのが、授業者の反省から始まる協議である。しかし、教員には授業者が反省していることを改めて指摘することに遠慮する傾向がある。これでは授業改善につながらない。よって授業者の反省は協議全体を終えてからにしたい。以下、授業者の反省をY教諭の発言通りに掲載する。(※は筆者のコメント)

#### ア. 座席

「校長先生(筆者)からのアドバイスで円形の授業に初めて挑戦した。本音を出させ、より話し合いに集中させる効果があった」(※円型の座席をフルーツバスケット型座席と呼んでいる。さて、これに至った経緯がある。H教諭から「どうも授業が、教員から生徒へというように一方通行になってしまう」と相談があった。そこで、「机を取っ払ったら」と提案したことが始まりである)

#### イ. まとめ

「友情という価値について、自分の中で落ちきれていないところがあった。そのため、授業の終わり方、特に最後の話(No.127)は生徒の心に落ちていなかった」

#### ウ. 発問

「発問は2つまでという校長先生からのアドバイスをもらい、絞った発問で、授業を展開する良さを感じることが出来た。また、より考えさせることが出来る発問をするために、教材解釈と生徒理解が必要だと改めて感じる事が出来た」

#### エ. 学級経営

「1年間を通して抽出生徒Fに焦点を当てて学級経営をしてきた。Fに直接的な指導をするのではなく、まずは周りの生徒を育てることを考えた。その周りの生徒が、Fにいい影響を与えることが出来るような学級を築くことを意識してきた」(※とりわけ道徳の授業には、学級経営が反映される。教室の空気で、学級経営がうまくいっているかどうかは、一瞬にして分かる)

オ. 道徳の授業をすることについて

「道徳の授業の大切さを、改めて感じた1時間であった。今後も、道徳の授業で勝負する気持ちで、取り組んでいきたい」(※道徳の授業は、生徒を深く理解するための時間である)

カ. 授業を終えて

「貴重な体験だった。授業をするまでの間に、たくさん先生の話が出来たこと、授業後の検討会で授業(生徒F)について考えてもらったことは、自分の財産になった。その中で生徒理解は、自分自身の教員としての永遠のテーマであると感じた。校長先生から、日常の授業の改善を常に言われてきたが、K中学校の先生達と授業改善を切磋琢磨しながら教員として成長していきたいと思う」

## 9 授業分析の具体

本稿では、1時間の詳細な授業記録(逐語記録)を活用し生徒理解を核にした授業分析を行うことを授業改善の柱としてきた。よって授業後の協議も生徒Fの思考の動きを中心に行ってきた。しかし、このFの思考の動きは学級全体の思考の動き(生徒一人一人の思考の動きの集合体)の中の一部である。ここでは、そのまとめとして、はじめに学級全体の思考の動きを整理したうえで抽出生徒Fの思考の動きを捉えていく。

### 9.1 学級全体の思考の動き

逐語記録から全体の思考の動きを追う。

#### ア. キーワード自己犠牲

生徒は赤鬼と青鬼の行動から友達とは何かを考えていくのであるが、この授業のヤマ場(発問①②)のキーワードは自己犠牲と考える。何故ならこの教材で議論するのは、青鬼の行為は自己犠牲なのかどうかという教材解釈が深く関わっているからである。よって生徒の発言から何時そのワードが出されるかがポイントであった。しかし「自己犠牲」は予想より早い段階、教材を読んだ後の初発感想で「赤鬼のために自分を犠牲にして…何と言うんですかね…自分を犠牲にして友達のことを思う青鬼は優しい(No.028)」と智也から出されてしまっている。これはY教諭には予想外であっただろう。

このように、生徒の思考は予想外に動くことがある。そこに授業の難しさがある。

#### イ. 損得

次に全体の思考は、庄太の「いい友達だと思う…たった一匹の鬼に利益を与えているから(No.083)」そして、葵衣の「いい友達じゃない…青鬼は赤鬼のために、自分が損する…(No.087)」の発言から友達関係を損得で考えようと動いているのが分かる。

ウ．信頼(信用)の度合い

次に全体の思考は、古市の「例えば、通りすがりの人にナイフでさされてしまう、その時に身代わりに、守ってあげられるくらい仲がいいと、信頼出来ている(No.093)」、雄介の「赤鬼の思いを実現させたいと願う、信用し合える鬼同士がいい友達(No.105)」の発言後、信頼(信用)出来るとはどういうことなのか、に動いていく。

ここから友達とは何かについて、導き出していくのが「相手のことをすべて受け止めて、違うことは違うと言える関係(No.107 綾乃)」、「居心地がいい…(No.109 真由)」、「互いに分かりあってあげる(No.111 前川)」、「お互い理解し合う、辛いことがあったら聞いてくれる、自分のことを理解してくれる(No.116 友希)」、「言いたいことをはっきり聞いてくれて、お願いしたら、しっかり聞いてくれる(No.118 高良)」である。そして、Fの「全部をさらけ出せる、隠し事せず、心からさらけ出せる。隠し事はNG(No.122)」につながっていった。

エ．関わりの距離感

関わりの距離感を気にしているのは、「私が思うには、いい友達だと思うけどそれは、よくなかった。関わりすぎた。いい友達でも一線は引いてほしい。そこまでしなくても、一緒に何かを考えるならよかった(No.095)」やり過ぎかな？友達だけど、自分もやってあげるというのもあった(No.097)」の菜々の発言である。この発言は興味深い。先に「生徒の授業での思考の動きはその思考体制を基になされている。それが発言に滲みでると考える」と述べたが、まさにこの発言から、思考体制が透けて見える。

この時期、菜々は、友達との人間関係で悩み学校も欠席しがちになった生徒である。この発言はまさに教材の登場人物(青鬼と赤鬼)に自己投影した菜々の心の叫びである。この発言は、中学2年生における友人関係の難しさを物語っている本音と解釈したい。

また、「嫌なことがあっても雰囲気で察してあげられる(No.113 前川)」という発言も距離感を問題とした思考である。さて、菜々の「一線を引いてほしい(No.095)」という願いを実現するには前川が言う「雰囲気

気で察してあげられる(No.113)」ことが必要なだろう。このように、思考の動き(発言)は、他の思考の動き(発言)の影響を受けたり他に影響を与えたり、複雑に絡み合っている。逐語記録からそれが見えてくる。この絡み合いこそ生徒を成長させていくのであろう。

## 9.2 抽出生徒Fの思考の動き

一般的に抽出生徒を分析する場合、授業者は授業の節目で意図的指名をする必要がある。発言回数が少ないと分析に耐えられないからである。今回Fは16回発言している。最低この授業のような回数が必要である。そして、その生徒の発言とその周辺の発言を抜き出すことが抽出生徒の思考の動きを追うには効果的である。以下に抽出生徒Fの発言を抜き出す。

ア．抽出生徒Fの発言

No.	Y教諭＝T・抽出生徒Fの発言等	
002	T	道德とは？
003	F	そうですね、人生勉強
004	T	2月3日と言えば…
005	F	節分
006	T	豆まきした？
007	F	うん
008	T	何を追い出した？
009	F	俺自身。俺の敵は俺…自分の弱いところを追い出したい
045	T	では、青鬼はいい友達ですか(発問①)
046	F	分からないです
047	T	何が？
048	F	迷っています
049	T	どう迷っている？
050	F	青鬼は赤鬼のためにやったが、本当は分からない。赤鬼は心残りがある…
051	T	Fの意見について、どう思う？
052	恭平	お互いがお互いのことを思ってやったんだから、いい友達
053	T	どう？
054	F	まだ、迷っています
055	T	すず
056	すず	いい友達だと思う
057	T	何で？
058	すず	赤鬼は人間と仲良くしたいと思っ

		ているから、赤鬼のためにやってあげているから。青鬼が暴れなかったら、人間と仲良く出来ない
059	T	目的を達成させたから、いい友達だと？
060	F	まだ、迷っている
072	T	青鬼はいい友達？
079	F	先生、少し話を変えていいですか？この言葉知っています？「何かを得ようとしたものは、何かを失う」
080	T	すごいな。で、青鬼はいい友達？
081	F	どっちでもない。いい友達なのか？なんか、ひっかかる。…何かが、見つかってない
082	T	Fの何かを見つけてくれる人いる？
083	庄太	いい友達だと思う。一人のために何か考えて行動にうつす。たくさんの人ではなく、たった一匹の鬼に利益を与えているから
084	T	犠牲を払えば、友達？
085	庄太	難しいです。僕にはまだ早いです
086	T	その人に、犠牲を払えば友達？
087	葵衣	あんまり、いい友達じゃないって思う。青鬼は赤鬼のために、自分が損する。青鬼が旅に出た。その間に何も出来ないから、赤鬼からは、青鬼のために何もやってあげていない
088	T	そこにひっかかっているのか？
089	F	はい
100	T	青鬼の満足じゃないのってことか。ずっと悩んでいた
101	F	えっと、2度も3度も泣いたと書いてある。赤鬼も後悔しているから、いい友達じゃない
102	T	いい友達って、どんな友達？(発問②)
121	T	しっかりした人がいれば？
122	F	全部をさらけ出せる、隠し事せず、心からさらけ出せる。隠し事はN G

123	T	一方の友達がさらけ出すでもいい？
124	F	だめです
125	T	菜々は、「いい友達でも一線引いてほしい」、全部さらけ出さなくていいよって言ったよ
126	F	え〜っと、さらけ出さなくてもいいけれど、気を使わなくていいなら、いい友達

イ。Fは何にひっかかっていたのか

Fの思考の動きをFとその周辺の他の生徒の発言から分析する。

Fは「自分の弱いところを追い出したい(No.009)」と発言している。Fの弱さは何なのだろう。また、この授業で、自分の弱いところを追い出せたのだろうか。

Fが自分の心の弱さを具体的に認識していたかどうかは分からない。しかし発言から推測すると「心からさらけ出す(No.122)」ことが出来ないところが、Fの弱さと捉えられないだろうか。もし、そうであれば、この授業でFの「分からないです(046)」「迷っています(No.048)」「まだ迷っています(No.054・060)」という発言から自身の弱さをさらけ出したと解釈したい。「分からない」などと発言するのは勇気があることである。Fは分からないという自分をさらけ出したのである。

さてNo.081で青鬼がいい友達と言い切れないFは、何にひっかかっていたのだろうか。周りの生徒はこのFのひっかかりを一生懸命探そうとしている。Fは、葵衣の「…赤鬼からは、青鬼のために何もやってあげていない(No.087)」という意見を聴き、Y教諭の「そこにひっかかっているのか？(098)」に対して「はい(No.099)」と答えている。そのことから、友達と言うのは一方通行の関係ではなく、双方向の関係であるべきという考えがうまくまとまらず、Fの頭の中でひっかかっていたと推測出来る。

さて、Fの思考で興味深いのは「全部をさらけ出せる、隠し事せず、心からさらけ出せる。隠し事はN G(No.122)」から「さらけ出さなくてもいいけれど、気を使わなくていい(No.126)」に、動いていっている箇所である。F本人の中で「さらけ出す」と「気を使わなくていい」は同意だったのだろう。しかし、菜々の発言を取り上げたY教諭の切り返しにより、「気を使わない＝全てさらけ出す」という論理から「さらけ出さ

なくてもよい」が「気を使わせない」に整理されていたのだろう。このことから、Fのいい友達の定義は「気を使わなくていい関係」という結論に到達したと解釈出来る。この結論に到達したことこそ、本授業でのFの成長である。

## 10 おわりに

教員は、教室で授業だけやっていればよいというわけにはいかない。「東ニ病氣ノ子アレバ保健室ニ走り、北ニ喧嘩アレバ仲裁ニ入り」と、毎日次から次へと何かが起こり、その対応もあれば事務処理もある。そのような中、多くの教員が、授業研究に力を入れなければならないと思いつつも、日々の忙しさに追われながら授業をこなしているだけの姿が浮かび上がってくる。しかし、教員は授業のプロである。常に授業に対する自己変革が必要である。

そのために逐語記録を基に授業分析を行っていく。この授業を文章化して逐語記録にしていくことは、非常に時間のかかることである。しかし、そこから生徒の発言の一つ一つを丹念に読み取っていくと、生徒の発言の重さ、可能性の大きさを感じ取ることが出来る。そして、そのことは結論的にこれまで表面的な言動だけでFを理解してきたことを教員に突きつけ、Fを未熟なものとして捉えるのではなく、一人の個性をもった生徒と捉えることが出来るように教員を変えてくれるのである。そこに教員の成長がある。

最後に、Fの真剣に「分かりません」と言った言葉にY教諭が一瞬戸惑いを見せた表情は忘れることが出来ない。そこには、教員と生徒の間に緊張が生じていた。授業は生徒との真剣勝負である。だから面白い。

るために重要なものである。とりわけ経験の浅い教員は、取組み方にもよるが、指導案を書くことによって、教員としての力がつくと考えている。

## 引用文献

- 1) 前田治著『道徳の授業における教師の悩みに関する研究 大学教育出版 P7(2015)
- 2) 田島薫著『授業分析の手順と考え方』黎明書房 P18(2001)
- 3) 社会科の初志をつらぬく会編著 上田薫『社会科の初志をつらぬく会の授業記録第2集』明治図書 P1(1976)
- 4) 的場正美・柴田好章編著 的場正美『授業研究と授業の創造』溪水社 P6(2013)
- 5) 社会科の初志をつらぬく会編著 重松鷹泰『社会科の初志をつらぬく会の授業記録第1集』明治図書 P17(1976)
- 6) 的場正美・柴田好章編著 的場正美『授業研究と授業の創造』溪水社 P10(2013)

## 参考文献

- ・前田治著『学校の風景そして授業の風景—子どもと教師の学び合—』大学教育出版(2017)
- ・田島薫著『授業分析の手順と考え方』黎明書房(2001)
- ・社会科の初志をつらぬく会編著『社会科の初志をつらぬく会の授業記録第1集』明治図書(1974)
- ・社会科の初志をつらぬく会編著『社会科の初志をつらぬく会の授業記録第2集』明治図書(1976)
- ・上田薫著『子どものなかに生きた人間を見よ—教育低迷克服の道—』国土社(1999)
- ・皇紀夫・矢野智司編著『日本の教育人間学』玉川大学出版部(1999)
- ・清水毅四郎著『個の自立を支える授業の探究』滋賀大学教育学部(2001)
- ・川合春路編著『教育をひらき支える言葉—人生と教育へのアフォリズム(警句)—』黎明書房(2000)

(原稿受理年月日 2018 年 10 月 11 日)

## 注

- (1) 富山県の堀川小学校・静岡県安東小学校等、日常の授業改善に取り組んでいる学校もある。
- (2) 講義中心の授業がすべてだめと、論じているのではない。講義中心の授業も必要である。
- (3) 日本の教育学者、重松 鷹泰(しげまつ たかやす、1908～1995 年)1932 年東京文理科大学教育学科卒、東京府豊島師範学校講師、東京府学務部勤務、1946 年文部省教科書局小学校社会科担当、1948 年奈良女子高等師範学校付属小学校主事、1952 年名古屋大学教育学部教授。同大教育方法学研究室にて授業分析の方法を開発。
- (4) 指導案は教材を構造的に理解し、計画的に授業を続け